ISSN0915−020X

イタリア圖書 51

NUOVA SERIE

Biblioteca Italiana

●SEMESTRALE
●DATA 2014. 10. 28

ITALIA SHOBO Co.,Ltd. (Casa dei Libri Italiani)
No.23 2-chome, Kanda Jimbo-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0051
Tel. 03-3262-1656　Fax. 03-3234-6469

ローマの外人墓地（非カトリック教徒墓地）逍遥
（ローマの猫　5）……松永　文夫　2

イタリア憲法と集団的自衛権……森下　正弘　8

愛書家グリエルモ・リブリ（その7）……折田　洋晴　14

寺崎武男の絵の本質――ディナミックとオーケストラチオン……寺崎　裕則　31

イタリア関係新聞記事・書誌索引 2014. 4 ～ 2014. 9……編　集　部　45

イタリア書房

INDICE

Una passeggiata per il Cimitero Acattolico di Roma
(Come un Gatto a Roma 5) ……Fumio MATSUNAGA
Costituzione italiana e autodifesa collettiva……Masahiro MORISHITA
Guglielmo Libri, uno bibliofilo (7)……Hiroharu ORITA
Idea della pittura di Takeo Terasaki: dinamica e orchestrazione……Hironori TERASAKII

Una lista delle recensioni delle pubblicazioni giapponesi sull'Italia 2014.4 ～ 2014.9

●●●●●

あとがき

二つの大型台風が列島を駆け抜けた秋に「イタリア図書」Nuova Serie 51号をお届けします。

10月初旬に仕事で海外へ行きましたが、フィレンツェのパラッツォ・ヴェッキオの向かいのシャネルのウインドーを見てみると女性服の足元は革靴ではなくかわいいスニーカーになっていました。街中では年配の女性がこれを履きこなし、若いお洒落な女性がマックスマーラのスニーカーを身に着けているのをみてヨーロッパの柔軟な変化を感じました。今イタリアではスニーカーが流行っているのだそうです。

松永氏による、イタリア人がヴァカンスを取らなくなってきたという話に衝撃を感じました。またイタリアはカトリック国なので非カトリック教徒の墓地が日本でいう外国人墓地にあたるというのにも今更ながら軽いカルチャー・ショックを感じます。以前小誌において、故木村裕主氏の「ローマに眠る二人の日本人」（Nuova Serie No.8. 1991年11月刊）でも触れられたことがありますが、そこに見出す日本との関係に新鮮な発見があります。

森下氏による「イタリア憲法と集団的自衛権」は日本が現在直面している問題をイタリアでは憲法上どのように解釈し合意してきたのかが簡潔に纏められていて有益且つタイムリーな紹介と思います。

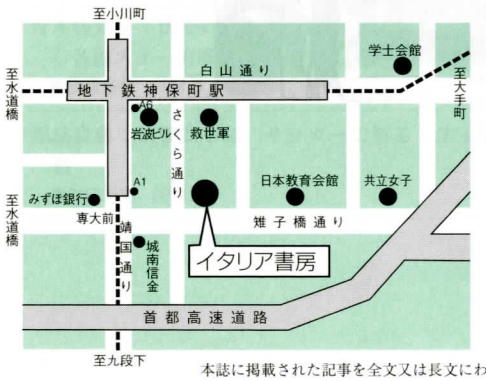
折田氏の「リブリ」連載は古書の収集や流通の話になり緊張感漂う展開になってきました。

寺崎氏による御尊父寺崎武男についての連載は今回が最終回になります。11月16日まで久米美術館で開催されている「寺崎武男―心の故郷イタリア展」には寺崎裕則氏が毎日会場におられるとのことです。

小誌に何度かご執筆いただいている岩倉具忠・翔子ご夫妻が、9月18-19-20日にレッチェで開催されたAISTUGIA（日本文化研究）第38回大会にご参加なさったとのこと。日伊関係につきまたご執筆いただければと目論んでおります。

皆様の感想等お寄せいただければ幸いです。

（伊藤　道一）



発行人：伊藤道一
編　集：伊藤道一　林杲之介　髙橋満
発行所：株式会社イタリア書房
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町2-23
電話：03-3262-1656　FAX：03-3234-6469
e-mail：info@italiashobo.co.jp

印刷所：㈱トーコー印刷
〒176-0021 東京都練馬区貫井3-19-6 電話：03-3926-8111

定価¥500　年間購読料¥1000（年2回刊行）

都営地下鉄新宿線・三田線/東京メトロ半蔵門線
神保町駅A1出口 徒歩2分

本誌に掲載された記事を全文又は長文にわたり抜粋して転載される場合には、必ず事前にイタリア書房編集部へ連絡を願います。

ローマの外人墓地（非カトリック教徒墓地）逍遥

ローマの猫 5

松永 文夫

今回は猫の本分にかえってローマの街を少し歩いてみたい。と言ってもローマの街の喧噪を横目で見過ごして行くは昼寝に格好の場所。その前に猫らしく少々気ままな寄り道をしてみる。

今年のローマの夏は例年になく変わりやすい不安定な天気が続いた。1週間と晴れた日が続くことはまれで、時に雷雨、時にさらさらと弱い雨の降るぐずついた天気が飛び石のように挟まった。いつもならナボナ広場かどこかの噴水に入って涼をとる観光客を写すニュースも今年はついぞ見ることがなく、過ごしやすいといえばそうだが、どうにもローマらしい迫力に欠ける夏だった。近隣の海水浴場も暑くなりきらない気候のせいで閑古鳥が鳴いている風景がしばしばニュースに取り上げられた。そんな気候も手伝って、今年は人々のヴァカンスの出足もずいぶんと遅いように見受けられた。いや、気候のせいばかりではなく、近年ではイタリア人もそうゆっくりとヴァカンスを楽しまなくなったようだ。

ある調査によれば1985年には一人当たり平均18.9日のヴァカンスをとっていたのが、今年は10.8日、この30年間でほぼ半減したと云う。ヴァカンスに出掛ける人の数自体がここ5、6年で大きく減少している。2008年には人口の49%、2,940万人がヴァカンスをとっていたのに対し、今年は31%、1,870万人になるという予測が出ていた。7割のイタリア人がヴァカンスをとらないというのはいくらなんでも大袈裟ではないかと思ったら、あるイタリア人曰く、1週間くらい休みをとって近所の海で遊んでくるのはヴァカンスと呼ばないのだそうだ。日本でもゴールデンウィークや盆休みの「海外旅行は安・近・短」などといわれたことがあったと思うが、今年のイタリア人の夏休みもbrevi, low cost, vicino casa、まさに「安・近・短」と報じられていた。イタリアでは今年に入ってレンツィ首相が39歳という若さで華々しく登場したが、いまだに景気が良くなったという話は聞いたことがない。むしろ、新聞では若年層の失業率が40%を越えたといったニュースが紙面を賑わす。夏休みの過ごし方の変化は近年の経済危機が拍車をかけているに違いない。とはいえ、グローバルな経済、社会の進展の中でまずは人生を楽しむというイタリア人のライフスタイル自体が少しずつ変わって来ているのだとしたら、少々寂しい気がしないでもない。

日本では避暑というとまず軽井沢を思い出す。軽井沢の避暑地としての歴史は明治20年代にカナダ人宣教師が滞在したことに始まるという。開国して20年というのは早い。しかし、その軽井沢が騒がしくなったと云って大正時代に同じくカナダ人の宣教師の一団が奥信濃の野尻湖畔に新しい避暑地を開いたことはあまり知られていない。現在でも三百戸ほどの別荘が湖を見下ろす山の斜面に点在し、国際村と呼ばれて、夏になると賑わいを見せる。今では日本人も含め様々な国の人々がこの国際村で夏の休暇を過ごしている。とは云ってもお洒落なブティックやカフェが軒を連ねる観光地と化した軽井沢とは異なり、東京からも関西からも遠いせいだろうか、この奥信濃の避暑地はいまだにどこか田舎っぽいのどかな佇まいである。

この避暑地を最初に開いたカナダ人宣教師のひとりにダニエル・ノーマンという宣教師がいる。ノーマン自身はいろいろあって野尻湖に滞在することはなかったが、長野県の各地で布教活動にあたり、地元の人々にノルマンさんと呼ばれて親しまれた。このダニエル・ノーマンの息子の一人がハーバート・ノーマンである。日本では悲劇的死を遂げた日本生まれのカナダ人外交官として以上に、日本史の片隅に埋もれていた江戸時代中期の思想家安藤昌益を世に出した歴史学者として、また日本でも海外でも高く評価された「日本における近代国家の成立」を著した日本研究者として名高い。1909年軽井沢に生まれたハーバートはケンブリッジ大学卒業後、戦前戦後を通じて日本の多くの文化人、研究者と親交を結び、日本研究論文を発表するとともに、外交官として戦争直後のカナダ政府駐日代表、情報部長、ニュージーランド高等弁務官、在エジプト大使と重要な仕事に携わってきた。その彼が第2次世界大戦後のマッカーシーによる赤狩り旋風に巻き込まれ、赴任地カイロで突然の自殺をはかったのは1957年のことだった。

ここで話はイタリアに戻る。

このカナダ人外交官にして日本研究者、ハーバート・ノーマンが埋葬されている場所がローマの「非カトリック教徒墓地（Il Cimitero Acattolico di Roma）」である。ノーマンの遺体はカナダ空軍の手でカイロからローマに運ばれ、荼毘に付された後、この墓地に遺灰が納められた。なんの儀式も行われず、立ち会ったのは夫人と大使館員2名と墓地の管理人の4名だけだったという。

カトリックの総本山ヴァチカンを抱えるローマには歴代の教皇、日本人にもなじみの深いロヨラやザビエルなども含む諸聖人、そしてラファエロやフラ・アンジェリコなどの芸術家等々数多くの西洋史にその名を残す人物がバロックの壮麗な建築物の中で過剰なまでの装飾に飾られ、美しい絵画や彫刻に囲まれて、日々多くの信徒や観光客の訪問を受けている。そんなローマにあって、市の中心からはずれたアウレリウスの城壁沿いの一角にひっそりと静かに非カトリック教徒のための墓地が存在していることは、必ずしも広く知られているわけではないだろう。夏のヴァカンスからハーバート・ノーマンと気の向くままに寄り道をしたが、今回はこのローマの密やかな慰霊の地を紹介したい。

旧市街の中心からアヴェンティーノの丘を越えてオスティエンセの駅の近く、ピラミデ（紀元前18年から12年に建設されたガイウス・ケスティウスのピラミッド型の墓 Piramide di Caio Cestio）に接したアウレリアヌスの城壁沿いにあるこの墓地の成立は1700年代に遡る。

直接のきっかけはイギリス・スチュアート朝のジェームズ3世（ジェームズ・フランシス・エドワード・スチュワート。1688年のイギリス名誉革命によって追われたジェームズ2世の王子）が亡命先のフランスからも追放され、時の法王クレメンス11世の招きでローマに住み始めたことに始まる。王に付き従ってローマに入った人々の中にはプロテスタントが多くいたという。王側からの要請に応え、クレメンス11世はローマで亡くなるプロテスタントはピラミデ脇の城壁内の土地に埋葬してよいと認める。この土地は当時のローマ市街地からは遠く離れ、放牧の場所として使われていた牧草地であった。

最初に埋葬されたのはエジンバラの医師アーサーという人物で1716年、ジェームズ3世が実際にローマに入った1718年の2年前という記録が残っている。その後1750年までに10人以上、これには宮廷人のみならず、グランド・ツアーでローマに来て客死した人々も含まれる。確認できているもっとも古い墓は1738年に亡くなったGeorge Langtonというグランド・ツアー中のウェールズ出身の若者のものである。初期には簡単な墓石が置かれていただけらしく、多くは失われているが、残っているもっとも古い石のモニュメントは1765年に事故死したGeorge Werpupという ハノーバー出身の若い貴族の墓標である。

現在この墓地の名称は「非カトリック教徒墓地」（伊名：Il Cimitero Acattolico di Roma、英名：The Non-Catholic Cemetery in Rome）であるが、プロテスタント墓地、英国人墓地などと呼ばれることもある。今手許にあるBLUE GUIDE ROMEでもThe Protestant Cemeteryとして紹介されている。英国やプロテスタント系の国から来た旅行者には比較的名高い観光スポットのひとつにもなっているのは、グランド・ツアー中に不慮の死を遂げた人々のほか、ローマの地で客死した多くの芸術家、音楽家、作家などが埋葬されているためだろう。英国のロマン派の詩人、ジョン・キーツとパーシー・ビッシュ・シェリーの二人は日本人にも馴染みの深い名前である。

キーツは結核の療養のため1820年11月ローマに着く。住んだ場所はスペイン階段の脇、窓から眼下にスペイン広場の賑わいを見渡せる場所だ。現在はThe Keats-Shelley House

として公開されている。療養むなしく、キーツが亡くなったのは翌1821年2月23日、25歳の若さであった。墓碑にはキーツ自身の遺言により、

> Here lies one whose name was writ in water
> その名を水に書かれし者、ここに眠る

と書かれている。キーツの名前はそこにはない。

シェリーが亡くなったのは翌1822年7月8日である。イタリアで過ごしていたシェリーは帆船で航海中に暴風雨に巻き込まれて水死する。享年29歳。1ヶ月後に発見された死体は火葬に付され、翌23年1月に遺灰が墓地に埋葬された。

シェリーの墓にはシェイクスピアの「あらし」の中の叙情詩の一部が彫り込まれている。

Nothing of him that doth fade	むくろは朽ちずわだつみの
But doth suffer a sea-change	力によりてゆたかにも
Into something rich and strange	奇しきものとなりにけり

（豊田実訳、岩波文庫）

この墓地には5人の日本人の墓がある。

3人は初代の在イタリア特命全権公使河瀬真孝の幼子達で、1874年から1876年にかけて、それぞれ1歳になる前に命を落としている。河瀬真孝は長州藩士として生まれ、英国に留学、帰国後しばらくしてイタリア・オーストリア公使として赴任、任期は1873年から1878年までの5年に及ぶ。イタリアから日本に渡り、工部美術学校で教鞭をとったお雇い外国人3名、絵画のAntonio Fontanesi、彫刻のVincenzo Ragusa、建築のGiovanni Vincenzo Cappellettiを日本に招く仕事をしたのはこの河瀬真孝である。

漢字で大きく「大日本山田貢一郎之墓」と書かれた墓石がある。広島安芸地方出身、1883年1月15日、33歳でローマにて没、と背面にフランス語で書かれている。この人物は日本でもっとも早い西洋建築の本と云われる「西洋家作ひながた」（Charles Bruce Allen著、原題名Cottage building, or, Hints for improving the dwellings of the laboring classes）という書物を村田文夫とともに翻訳した人間と思われる。村田は幕末の広島藩に生まれ、英国に留学、帰国後は藩の洋学教授や明治政府の官僚を経験した後、ジャーナリストとして活躍した。「西洋聞見録」という西洋文化の紹介書も書いている。他方、山田は明治2年6月に広島で洋学所が開校された際に洋学教授村田文夫のもとで助教を務めたことが知られるに過ぎない。墓地にはAnglicano（英国国教徒）との記録が残されているので、同郷の村田と同様英国に留学し、帰国後は村田の助手のような立場だったのではないかと想像されるが、その山田がどのような経緯でイタリアに渡ったのか、今のところ手がかりはない。

最後の一人は1995年に逝去されたミラノ大学西川一郎教授である。「小学館和伊辞典」の編集・執筆者としてご存じの方も多いと思う。この墓地に埋葬されたのはつい数年前で、この墓地がいまだに現役で活動していることを物語っている。

外人墓地などと呼ばれたりすることもあるが、イタリア人も埋葬されている。アントニ

オ・グラムシの墓はここにある。1937年に死去した際はヴェラーノの墓地に葬られたが、家族の希望でその1年後にこの墓地に移されたのだと云う。

ハーバート・ノーマンの話に少し戻る。

ノーマンの悲劇的死後20年経った1977年、「思想」誌（634号）で特集が編まれ、全4巻の全集が刊行された。「思想」誌には遠山茂樹、加藤周一、丸山真男、中野好夫等々、ノーマンと親交を結び、あるいは敬愛した戦後日本を代表する多数の知識人、学者研究者の文章が並ぶ。日本人以外では英米の日本学教授に交じってイタリアの日本研究者がひとり文章を寄せている。ナポリ大学オリエンターレのStefano Bellieniである。Bellieniはノーマンの「日本における近代国家の成立」を彼のゼミナールで取り上げた経験を紹介し、「ノーマンの中にはまだまだ探らなければならない深い鉱脈がある」とその献辞を結んでいる。Bellieniは日本の近現代史の研究者として将来を嘱望された若手だったが、惜しいことに1986年、41歳の若さでこの世を去った。AISTUGIA（伊日研究学会）では1987年Bellieniを追悼する会を催し、ナポリ大学のFranco Mazzei教授はIL GIAPPONE誌（VOLUME XXVI 1986）に追悼文を寄せている。

米国では70年代に入って歴史学者としてのノーマンの再評価が始まり、1975年にはジョン・ダワーによって「ノーマン選集」の形で主著が再刊されたが、外交官としてのノーマンがカナダ連邦議会により正式に社会的名誉を回復したのは1990年という。ローマの彼の墓には2000年、カナダ政府により「愛国者カナダ人」の碑が建てられた。ノーマンの功績を讃えたその碑の最後に白隣の俳句が添えられている。

Well, then, let' s follow	いざ行かん
the peal of bells	彼岸の鐘の
to the yonder shore	あと追うて

大正12年発行の「新選俳諧年表」（平林鳳二・大西一外著、書画珍本雑誌社発行）によれば白隣は1829年生1897年没の俳人で近江の人とある。この辞世の句は「Japanese Death Poems」（Yoel Hoffmann編著、Charles E. Tuttle Company発行、1986年）に英訳が見られる。ノーマンの墓碑にどのような経緯でこの句が捧げられたのかはわからないが、ノーマンの強い意志と確信を示す辞世ではないかと思う。

ローマのはずれの墓地にある目立たない小さな墓だが、こんなところにも日本との深い繋がりの糸があるのを見い出すのである。

閑話休題。この墓地には約300年間で5千人を越える人々が埋葬され、今でも約2千5百人の墓が現存する。ヴァチカンに面倒を見てもらえないこの墓地は現在プロテスタントやその他非カトリック系のキリスト教徒を多く有する14カ国の大使により委員会が組織され、そのメンバーの中から毎年選出される1名が責任者となって管理している。実際の運営業務は委員会によって指名されたイタリア人がdirettoreという肩書きをもって行う。保守管理費用は葬儀料や寄付などで賄われている。現在では友の会が組織されていて、敷地内には小さなビジターセンターもでき、訪れる観光客の相手をしている。

墓地はピラミデを背景に、高く伸びた糸杉と笠が開いたようなローマの松の木立から落ちる陰と陽の光が斑模様を作って風にゆらめく下、アジサイや夾竹桃、バラ、ゼラニウム、アネモネなど季節折々の花々に囲まれて緑豊かに拡がっている。現在の墓地の門から入ると「まるでカーブをつけ忘れた円形劇場に入ってゆくような感じ」で「階段状に立ち並んだ墓石群の背後は崩れ落ちたローマ時代の城壁になっている」。（ステファノ・ベリエニ「むくろは朽ちずわだつみの……」（「思想」634号、p182））シェリーがある手紙で友人にthe most beautiful and solemn cemetery I have ever beheldと書いたように美しく穏やかな場所である。キーツ、シェリーのみならず、ローマで客死した文学者、芸術家の墓を訪ねたり、名高い墓碑彫刻を探しながら静かに散策をする人々の姿が時折見える。ローマのバロックの過剰な装飾に圧倒されて一息つきたくなった観光客がいるなら、その心を少しは和ませてくれるかもしれない。そしてここは野良猫たちにも格好の遊び場になっている。

ローマの街中、Largo Torre Argentinaの遺跡が野良猫、捨て猫のコロニー（保護地区）になっていることはよく知られているが、ローマには猫のコロニーがもうひとつある。それがこの非キリスト教徒墓地とピラミデの間にある一画で、Gattare（ローマ方言で、野良猫達にえさをあげて世話をするSignoraたちのことを云うのだそうだ）が今日も猫に囲まれて面倒をなにくれとなく見ている。ここは猫にとっても慰安の場所のようだ。それでは、さんざ寄り道を重ねながらの墓地の話はこれくらいにして、そろそろ昼寝を決め込むことにするか。（了）

（ローマ日本文化会館館長）

注記

本稿執筆に際しては主に「Il Cimitero Acattolico di Roma – La storia, le persone e una soprovvivenza lunga 300 anni」（Nicholas Stanley-Price著、Il Cimitero Accattolico di Roma発行，2014）を参考にさせて頂くとともに、著者でありAmici del Cimitero Acattolico di Roma Newsletterの編集者であるNicolas Stanley-Price氏のご協力を得た。またハーバート・ノーマンに関し在京カナダ大使館E・H・ノーマン図書館からも貴重な情報を頂いた。記して御礼を申し上げたい。